

平成 22 年度 海外研修派遣報告書

県立奈良病院 澤 悟史

この度、海外研修派遣に参加させていただき、講義・実習を通じて、非常に有意義でかつ刺激的な1週間を過ごすことができた。私自身、事前にいくつかの課題をもってこの研修に臨んだわけであるが、7TMRI 装置や分子イメージングをはじめとする世界最先端の医療技術やシステム、各モダリティのマネージメント、画質と被ばくに関する意識、医療制度の違いや技師への教育制度等について体験して学んでくることが主な目的であった。

まず、7T という高磁場 MRI 装置を実際に体感してみて、非常に MRI のポテンシャルを感じたが、同時に臨床機として実用化していくには適応や管理体制に課題が多く、今後の技術革新が不可欠であると感じた。また、MRI 装置の将来性についての講義では、究極的には 0T の MRI 装置が理想だと逆説的な発想で話されていたのが印象的であった。分子イメージングについてはこれからの分野でまだマウスレベルの研究であったが、今後どんどん研究が進み臨床に導入されていくであろうという可能性を感じさせる内容であった。ただ、化学的な講義が多く、技師にとっては不慣れな領域なのでこれからこの分野を学ぶ技師には必須の項目であると思われる。

また、アメリカはシステム構築がうまく非常に分業化が進んでおり、職務に対する役割も完全にシステム化され、研究施設や 3D ラボ、病院見学はもちろん、今回の研修全般を通じてそれを強く感じた。ゆえに日本のような Rotation 業務における各モダリティの教育やマネージメント上の弊害も生じず、いい意味で裏切られ、専門性を高めていくシステムとして効率的に機能しているようであった。

画質や被ばくに関しては技師も患者も意識が低いのか、特に日本ほど細かく気にしていないようで、むしろ検査に時間的余裕をもち検査全体としての質を高めようとしていることが印象的であった。さらに Sherman Outpatient Center での見学では患者のあらゆるニーズに応えるだけの設備、サービスが整っており、検査のみならず来院すること自体が快適に過ごせるように計算、コーディネートされた施設であり、素晴らしい。しかし、反面アメリカでは医療保険にランクがあり、低所得者は満足な医療サービスが受けられないといった深刻な問題を抱えており、今後の日本の医療制度にとっても動向が気になるところである。

また、全く偶然であったがスタンフォード病院で技師として働いておられる日本人の技師さんと食事をする機会があり、業務の実情や日本との違いについて現場の生の声が聞けたことも大変貴重な経験であった。

わずか1週間の研修ではあったが、楽しくかつ丁寧に指導していただいたので専門外の分野であっても非常に分かりやすく、その指導方法についても非常に勉強になった。今回、経験し学んだことは今後の自分の研究はもちろん、職場での教育指導やシステム構築の上で非常に刺激をうけた。一方で、今後もこの海外研修やスタンフォード大学との交流を継続していくよう、周囲に啓蒙していこうと思う。

最後に、Gary M. Glazer 先生や Michael Moseley 先生をはじめとするスタンフォードの講師の方々、このような機会を与えてくださった JSRT の皆様、毎夜遅くまでディスカッションした同行の皆様、引率の西川団長、GE ヘルスケアジャパンの方々、現地での通訳の方に心より感謝いたします。



Gary M. Glazer 先生、Michael Moseley 先生と参加者・スタッフ一同と講義室にて